



安城市議会議員 石川つばさ通信 号外

# 市政レポート

## 産経新聞の誤報に見る 情報の送り手・受け手

昨年12月に沖縄で発生した交通事故に関し、産経新聞は米海兵隊員が危険を顧みず、交通事故に遭った日本人男性を救った。直後に後続車にはねられた。という旨の報道をしました。併せて、その救出劇を報じなかった沖縄二紙について「日本人として恥」「報道機関を名乗る資格はない」などと批判しました。ところが、米海兵隊、沖縄県警、救助されたと報じられた日本人男性がいずれも米海兵隊員による救助を否定したことで、産経新聞は今月に入って誤報を認め謝罪することとなりました。

立場は違えど私自身、こうしたレポートの作成や議会発言に際しては気を使います。「市は議会で〇〇と答弁した」「××新聞の報道によれば」などの言葉を極力加えるよう意識しています。良く言えば情報ソースを明らかにしているとも言えるかもしれませんが、悪く言えば逃げの側面が強いことも否定できません。と言うのも、答弁した、報道された、というのは客観的事実であり、その中身については基本的に責任を問われないからです。言い換えれば、多くが二次情報と言えます。二次情報ですら気を遣うわけですから、他に先んじて自分が最初に情報発信をする案件などはその比でない程の注意を払って当然と言えます。

件の誤報に当てはめれば、「今回の事故に対し、米海兵隊員の妻はフェイスブックに〇〇と思いを綴っている。」という表記に留めておけば誤報とまでは言えなかったはず。米海兵隊員が救助と記事にしたいのであれば、その裏付けをとることは最低限必要な行為でしたが、警察にすら確認をしていなかったことを考えれば、ずさんと言わざるを得ません。

情報の受け手からも考えてみたいと思います。新聞もテレビもネットも情報を得る重要なツールではありますが、いずれも情報を誰かが提要してくれているわけです。全知全能な神ならともかく、人が情報提供を行う以上は必ず間違いが起こりえます。下手をすれば意図した虚偽も混ざっているかもしれません。したがって、真実も間違いも虚偽もごちゃ混ぜの中から、真実の情報（断じて気に入った情報ではない）だけを選び抜かなくてはなりません。これはかなり難しい事です。

「最近の若い者は新聞を読まずスマホばかり弄っているからダメだ」や「高齢者はネットが使いこなせず新聞を鵜呑みにするからダメだ」といった声を少なからず聞きますが、本質はそこではないと思います。重要なのは提供される情報の中身であって、閲覧方法が紙か電子かは枝葉にすぎません。月並みですが、最後は読む側のメディアリテラシーにかかっていると言えます。

参考までに、私は以下の様な事を判断基軸に据えています。もしその他の視点があればご指摘いただければと思います。

- ・いつ時点の情報か
- ・だれによる情報か
- ・情報ソースは明確か
- ・「関係者によると」等の不明確な表現ではないか
- ・その媒体や発信者の立ち位置や思想信条はどうか
- ・同媒体や同記者の過去の記事はどうか
- ・スポンサーなど利害関係はどうか
- ・意見の割れる事案については、対極同士を比較しどこまでは認識共有がなされているか
- ・元情報の確認が可能か
- ・部分的な録音や録画でなく全体像を確認できるものであるか